

総論

三宅 裕*

General Remarks

Yutaka MIYAKE

本号の特集は、2019年6月15日に筑波大学を会場として開催された、日本西アジア考古学会第24回大会における特別セッション「文明の原点を探る II 筑波大学の西アジア調査から」を基にして組まれたものである。これまでも筑波大学で総大会を開催した際には、関連企画として西アジア考古学関係資料の展示や解説冊子の刊行などをおこなってきたが、3回目となる今回は筑波大学による西アジア調査、特に北西シリアのエル・ルージュ盆地における調査成果を中心とするシンポジウムを開催することにした。

今回、このような特別セッションを企画した理由のひとつに、北西シリアにおける考古学的調査を長年にわたって主導してきた本学会の常木晃会長（当時）が、2019年度を以って筑波大学を退職することがあった。ひとつの節目を迎えるにあたり、これまでに実施してきた新石器時代を中心とする調査の成果を概観し、それが資料の蓄積が大きく進んだ現在の新石器時代研究の中にどのように位置づけられるのか検討してみることは、相応の意味があると考えたからである。特別セッションの発表者は、1990年から1992年にかけて実施された第1期のエル・ルージュ盆地における調査（岩崎卓也団長）への参加者と1997年から開始されたテル・アイン・エル・ケルク（Tell Ain-el Kerkh）遺跡の発掘調査（常木晃団長）に参加した初期のメンバーが中心となっている。発表者の中にはこれらの調査から出土した資料を基に博士論文をまとめ、現在第一線で活躍している研究者もおり、エル・ルージュ盆地での調査は人材育成の場としても大きな成果があったと評価することができる。その後も大学院生を中心とする若手研究者が育ちつつあるが、今回はプログラム上の制約もあり参加してもらうことはできなかった。

また、特別セッションの発表者は、全員が科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）「都市文明の本質 古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究」（領域代表者：筑波大学教授山田重郎）の計画研究「西アジア先史時代における生業と社会構造」に参画しているメンバーでもある。この研究プロジェクトでは、西アジアに都市が誕生する以前の時期に焦点を当て、特に「社会の複雑化」をキーワードと

してその時期の社会の様相解明を進め、その後の都市社会への理解を深めるための新たな視座を提供することを目的としている。その点において、新石器時代において大規模な拠点集落が存在し、スタンプ印章に代表される物資管理システムがいち早く確立され、海産貝類や黒曜石などにみられる長距離交易ネットワークが形成されていた北西シリアは、社会の複雑化を検討するための有効なケーススタディーの場ともなる。そこで、今回の特別セッションは本計画研究班の第6回研究会も兼ねさせていただいた。

今回の特集の論考は特別セッションをベースとしているとはいえ、必ずしもその際の発表内容と一致しているわけではない（特別セッションでの発表内容については、本号の「第24回大会発表要旨」も参照）。内容がほぼ一致している論考もあれば、発表内容の一部に焦点を当てテーマを深く掘り下げたもの、口頭での発表とは内容そのものが大きく異なるものもある。しかし、いずれもエル・ルージュ盆地での調査成果や資料を基本としており、周辺地域との関係も視野に入れながら広く西アジアの新石器時代を見通せる内容になっている。

常木論考はメガサイトと呼ばれることもある新石器時代の大規模集落を取り上げ、10 ha以上の規模を誇るテル・エル・ケルク（Tell el-Kerkh）遺跡の検討を中心に、その性格について論じている。メガサイトについては、比較的短期間の居住の跡が集積しているにすぎず、結果として規模が大きく見えるだけである



図1 エル・ルージュ盆地とテル・エル・ケルク遺跡

との批判もあるが、試掘調査の結果や遺物の分布範囲を基に、北西シリアには間違いなく大規模集落が存在していたことを示し、そうした集落を生み出した社会は階層制をもつような複雑な社会であった可能性を指摘する。先土器新石器時代 (PPN) A 期にまで遡るような大規模集落の事例も紹介されており、メガサイトの出現については PPNB 後期だけでなく、より長期的な視点から検討する必要が出てきたと言える。

久田論考はエル・ルージュ盆地周辺において実施した地質学的調査を基に、新石器時代における石材の利用を中心に検討している。エル・ルージュ盆地周辺では良質なフリントは産出せず、ある程度距離の離れた地域から入手していたことや装身具などに用いられた希少石材はラタキア北方に分布するオフィオライト地帯から獲得されていた可能性が高いことを指摘する。距離的には 30 km 程度ということになるかもしれないが、単純に在地の石材を利用するのではなく、良質で希少な石材の獲得に大きな労力をかけていた姿が浮かび上がってくる。こうした石材利用のあり方は、物資の流通という物質的な次元にとどまるものではなく、その背後にある良質で希少な資源の獲得を強く希求する社会の存在と密接に関わっていると考えるべきだろう。

有村論考は、テル・アイン・エル・ケルク遺跡で確認された PPNB 前期の資料を基にして、新石器時代の典型的な文化的要素が出そろい、それが汎レヴァント的に広がっていく PPNB 期の様相について論じている。従来の一元的なユーフラテス河中流域起源説を批判的に検討し、地域的な差異を内包しつつ広域的なまとまりが形成されているのが実態であると指摘する。各地で PPNB 前期の遺跡が確認されるようになった現在、そうした資料に基づいて全体を再評価すべき時期に来ていることは間違いない。今後は、各地域における PPNA 期からの継続性という視点とともに、PPNB 期に広域的なまとまりを形成させた営みや社会的ネットワークのあり方について議論を深めていく必要があるだろう。

前田論考は黒曜石交易の様相について、エル・ルージュ盆地やクミナス (Qmînas) 遺跡からの産地同定データを中心に、広くレヴァント全域の状況を検討している。巨視的に見た場合にはレヴァント全域に敷衍できるような産地の変化の傾向が認められる一方で、地域的な差異も存在することを指摘する。そうした差異は、変化が現れる時期の違い、中央アナトリアと東アナトリアの 2 大産地内での細かな産地の違い、石器



図2 特別セッションにおける総合討論

製作技術あるいは黒曜石の流通形態（原石、調整体、石刃）の違いといったところに認められるという。カレテペ (Kaletepe) 遺跡のように原産地付近の石器製作址の調査は多くの新知見をもたらしたが、他の産地でもそのような事例が増えてくると、多様な黒曜石交易の実態により詳細に迫っていくことが可能になると期待される。

三宅論考は、西アジアの新石器時代を代表する石器である尖頭器を取り上げ、農耕牧畜の時代の狩猟具という特異な存在について検討する。時代を経るに従い大型化し装飾性を強めていく尖頭器については、それを単なる実用的な狩猟具と考えたのではうまく説明できず、社会的な意味の付与された道具であった可能性を指摘する。農耕牧畜が開始されてもすぐに社会が大きく変容したわけではなく、むしろ狩猟者としての自己意識はより強化された可能性があり、尖頭器の変化はそうした社会のあり方が反映されていると解釈する。

論考の執筆者の多くがエル・ルージュ盆地での調査に携わっていた 1990 年代後半から 2000 年代前半と比べると、新石器時代の調査は大きく進展し、資料の蓄積も大きく進んだ。ギョベクリ・テペ (Göbekli Tepe) 遺跡の評価も大枠ではほぼ定まり、新石器時代観も当時とは大きく変わってきたと言える。そうした中であって、エル・ルージュ盆地から得られた資料の価値は、時を経て色褪せるどころか、ますますその重要性を増しているように思われる。その一端を今回の特集で感じ取っていただけたら幸いである。最後になってしまったが、特別セッションでの発表だけでなく、かなり無理をお願いして、短期間のうちに貴重な論考をまとめていただいた執筆者各位に感謝申し上げます。